

地域科学部での教育実践と学生の成長

『社会活動演習』の取り組みを中心に



近藤 真庸

岐阜大学・地域科学部

□ フリーペーパー『Region』にみる学生像

「いい一日になりそうだ。」

出来たてのホカホカ『Region(レギオン)』（創刊十号）を学生がわざわざ研究室まで届けてくれたからである。

年に数回発行されるこのフリーペーパーを、私が楽しみに待っているのを学生が覚えていてくれたかと思うと、それだけでうれしい気持ちになる。

A4判五十頁。いまだき珍しいモノクロとはいえ、写真

やイラストも豊富。レイアウトもよくて、読み応えもある。最新号の特集企画は「オレ流学生生活——活動的学生の実態に迫る!!」。

「学内活動派」「市民活動派」「学外活動派」の代表として紹介されているのは、いずれも講義・演習等で顔を知っている学生ばかり。なかでも、「DAYS JAPAN」サポーターズクラブ名古屋代表を務めるOさん(四年生、中村梧桐十野原仁ゼミ)の「市民活動派」としての活躍ぶりが、写真入りのインタビュー記事で掲載されているのが目に止まった。

〇さん(四年生)の場合

—「DAYS JAPAN」

サポーターズクラブ名古屋代表

☆好きな言葉

ピンチはチャンスだ

☆嫌いな言葉

私には関係ない



こんどう・まさのぶ ●一九五四年、愛知県生まれ ●専門は、健康教育論。「いのちと人権の教育学」をテーマに専門セミナーを開講している ●主な著書に、『養護教諭成立史の研究』養護教諭とは何かを求めて(大修館書店、二〇〇三年)、

『歌って、踊って、健康百歌』(明治図書、二〇〇一年)、『ヘシナリオ』形式による保健の授業(大修館書店、二〇〇〇年)、『はじめて学校で出会う性の授業』(財日本性教育協会、一九九八年)、『保健室の三十一文字』(星雲社、一九九八年)、『保健授業づくり実践論』(大修館書店、一九九七年)、『エイズ教育の進め方』(財日本性教育協会、一九九六年) ●ここ十数年間、全国各地の小・中・高校生や父母・教職員を対象とした性やエイズ、健康教育に関する講演を精力的に行っており、近年は教室で子どもたちに直接、自ら開発した作品としての授業プランによる「性の授業」「エイズの授業」などを行っている。

近年、十歳の子どもに「二分の一人式」をプレゼントしよう!」
「十四歳の子どもに、乳幼児とその親に出会うチャンスをも!」と提案している。「二分の一人式」のテーマソング「メモリー」など六曲を収めたCDアルバム『生きる』(歌・近藤真庸、音楽・近藤浩章)を二〇〇五年六月にリリース。

☆メッセージ

とりあえず自分と向き合ってみたらいかがでしょう?

Q 活動を始めたきっかけは?

若気の至りからか(笑)世の中がおかしいと思った。

それを変えたいと思ったとき、自分に出来ることは何かと考えた。もともと「DAYS JAPAN」は読んでいたし、何かしたいという自分の欲求と向こうのサポーターズクラブを作りたいという欲求と一致した。

Q 活動する理由は?

「DAYS JAPAN」を広めたい。なぜ必要かを分かってもらいたい。写真展や講演会は考えてもらうきっかけになる。加えて、そういうことが大事だと思っている人たちをつなげられる。そのことで情報と思いを共有できる。

Q 活動を通して成長したと思いますか?

イベントの企画などスキルやコミュニケーション力がついた。脱ひきこもりもでき、少し明るくなった。そして世界も広がった。いつも家や大学など同じ場所にいたけど、いろんな場所に行くきっかけにもなった。

Q 入学時にやりたかったことは?

何もなかった。ただ何かやらな、と黙っていたけど、何をしたらいいか分からなかった。とりあえず自分できそうなことを少しずつやっていく中でやるのが広がっていった感じ。

Q やってよかったと思うことは？

楽しいし、毎日が生き活きしている。

F君(四年生)の場合

特集を企画・取材した学生編集スタッフによる「座談会」での

『Region』創刊時の編集長

F君(『Region』創刊時の編集長、四年生、竹内章郎ゼミ)の

発言も、読み飛ばすのがもったいないほどポジティブなものである。

—「いろんな価値観がある」っていうのはよく聞く話だけど、それっていうのは多くの人と実際に触れ合うことでしか実感できないものだから。成長っていうと「上に行く」って感じがするけど、それよりも「広がり」、自分自身の幅が広がったというのを感じるかな。

—(入学時は)ただ、卒業するとき「頑張ったじゃん、おれ」とは言いたかった。

—自分達の環境がしよほいと思うと「頑張らないと!」という意識はもつよね。

— 大学生活の一つのスパイスにぜひ！刺激がないのなら自分で刺激的な場所に行っちゃえばいいのさ！いろんな人に会えます。明らかに自分とは全然違うものを持つている人と出会い、そういう世界もあるのかと知ることができる。

— 二十年後の自分が「ああいう大学生活を送ってよかった」と思える自信が俺はある。これって重要じゃないかな。

— いろんなところに学ぶ場所はある。教室の中だけじゃないんだよ。それに、大学生って社会人と違って、失敗してもリスクが無いわけ。だからつかいことができるんだよ。

気がつくともう一時間も経っている。読みはじめると、結構ハマってしまいます。もう一本の特集企画「Regionアソシエーション」に見る『地域科学部生』の意識と行動」は、あとでじっくりと読ませてもらうことに決めた。それにしても、「あの頃」が嘘のようだ。

㊦ 「地域科学部」って何なの？

「あの頃」、とは…。

教養部の改組を契機に、学生定員(一学年)百十名、専任教員五十名の新設「総合学部」(政策・構造・文化・環境の四講座)として地域科学部が誕生したのはいまから九年前(一九九六年十月)のことである。その後、大学院(修士課程)もでき、地域政策と地域文化の二学科編成となつて現在に至っている。そして今年、十周年を迎えた。

私自身、教育学部から移籍したものの、初めの数年間は「そもそも地域科学部って何なの? 何を教育・研究すればいいの?」というような心境で不安な日々を送っていたのだった。

教員がそんな状態であれば、学生はなおさらのこと不安であつたにちがいない。「教員免許も資格も、何も取れない」「文理融合とは名ばかりで、物理学、化学、生物学、土木工学、建築学といった理系の教員と法学、経済学、社会学、文学、哲学、歴史学といった文系の教員がそれぞれ好き勝手な講義をしているだけではないか」といった学生の不満を耳にするたびに、自信を失い、後ろ向きになりそうなこともあつた。

だが、毎年四月、地域科学部で四年間の大学生活を送ることになった新入生の姿を見るたびに、卒業するときに「この学部で学べてよかった」と言わせたい、そんな教育をし

てみたい、という気持ちは強くなつていった。
到達した結論はこれだった。

自分には失うものは何もない。学生の声に耳を傾け、とりわけ卒業していく学生の評価を真摯に受けとめ、それを手がかりに少しずつ変えていけばいい。

学生たちが動き始めた!

— 『Region』の創刊、

『解体新書』づくりの発案

「地域科学部をおもしろくする生活上フリーマガジン」と銘打った、学生有志が編集する情報誌『Region

(レギオン)』が創刊されたのは、いまから三年前(二〇〇三年)のことである。

『Region』(創刊十号)の扉には、フリーペーパースタイルの雑誌刊行の意図が、次のように記されている。

Regionとは、学生同士の繋がりが作りにくいこの地域科学部において、新たな学部内の繋がりを作ろうと集まった有志のメンバーによって作成されているフリーペーパーです。

Regionは学生同士の情報共有や、各学生・教職員の表現の場となることを目的として作成されています。

具体的には先生方の紹介や、学生の自主的活動(サーク

ル・勉強会・学外での活動etc.)の紹介などを掲載していきま
す。なぜなら、「どんな人がどんなことをしているか」皆
さんに知ってもらうことが大切だと考えているからです。
ひいてはそれが皆さんの日常をより刺激的なものにしてく
れるのではないのでしょうか。

それ以外にも、この学部での生活において役立つ様々な
情報も掲載していきます。

私たちは、Regionが学部活性化の糸口になればと願って
います。

これと前後して、「後輩のために『専門セミナー』選択
を支援しよう!」というところで、大学生協総代グループが
小冊子『解体新書』を創刊する。*

私たちの学部では、一年次前期の「教養(入門)セミナー」、
一年次後期と二年次前期に開講される「基礎セミナー」を
含めたセミナー形式による少人数指導を軸にしたカリキュ
ラムを確立しており、その中核に位置しているのが「専門
セミナー(一学年定員四名)である。

先輩ゼミ生と全学部教員による「回答」からなる、「專
門セミナー」紹介が六十頁にわたって収められた『解体新
書(二〇〇六年度版)』の冒頭には、先輩から新二年生への
メッセージが、次のように記されている。

先生と話すことで先生の人柄も見え、選択のための更な
るヒントともなるでしょう。興味あるセミナーはとことん
訪問して、自分の関心ある分野についてじっくり話し合っ
てみてください。また、最初から一つのセミナーに絞るので
はなく、出来るだけ多くの先生に話を聞きに行きましょう。
学部発足後六年を経た「二〇〇三年」前後になってよう
やく、小冊子『解体新書』と情報誌『Region』の発刊に示
されたように、学生と共に学問・教育の創造をめざそうと
努めてきた地域科学部の取り組みの成果が現れ始めたの
だ。

以下、私の教育実践の歩みに即して、この十年間の地域
科学部の取り組みの一端とそこでの学生の姿を紹介する。

*地域科学部「専門セミナー」ガイダンスにおける、学生との協
同作業の試みについては、本誌四十三号(二〇〇六年八月)の「研
究室の窓」からの欄で紹介(執筆・近藤真庸)した。

目 「社会活動演習」を通して成長する学生たち

一年生対象の

“体験型”グループ学習

「社会活動演習」という必修
科目がある。

地域科学部に入学したばかり

の新生が、グループの仲間と一緒に力を合わせて一つの課題をやり遂げる「通過儀礼」ともいうべき体験型学習である。

学部発足以来、六、八名の専任教員が、自分の専門との関わりでフィールドを用意し、夏期休暇の四、五日間を活用して実施してきている。

どのプログラム(グループ)に参加するかは学生が選択する(人数制限のあるプログラムに希望が殺到したときは、第二、第三希望にまわることもある)。だから、五名くらいの少人数グループもあれば、二十名を超える場合もある。五月上旬に実施するガイダンス資料には、次のように記されている。

「『人間らしい交流と共存』を可能とする地域社会の実現とその人材の育成」をめざすという地域科学部の理念のもとづき、一年次から地域社会と関わりつつ学んでいく態度を育てることをねらっている。例えば、地域政策・環境・福祉・文化にかかわる団体・事業所等を訪問するなどして、そこでボランティア活動を含む実習を体験する。

また、この社会活動演習をきっかけに、岐阜県内の諸団体・事業所等と接点を持ち、継続的に関わりをもつていくようにしたい。

魅力的なプログラムで
学生の意欲を引き出す！
私も担当者の一人として、専門的関心と特技(?)を生かし、毎年、様々なプログラムを考案しては、学生の参加を呼びかけ、楽しみながら活動を創ってきた。

以下のプログラムがそれである。*

- ①術後の心臓病児とその家族の「乗鞍登山パスの旅」
(一泊二日)をサポートする！ (一九九七年度)
- ②創作ミュージカル「フレンズ」上演で、H I V / A I D S との共生を訴えよう！ (一九九八年度)
- ③岐阜大学キャンパス「バリアフリー作戦」(I) (一九九九年度)
- ④岐阜大学キャンパス「バリアフリー作戦」(II) (二〇〇〇年度)
- ⑤多文化共生時代のイベントづくり挑戦しよう！ (二〇〇一年度)
- ⑥子育て支援「有償ボランティア」体験をしませんか？ (I) (二〇〇二年度)
- ⑦子育て支援「有償ボランティア」体験をしませんか？ (II) (二〇〇三年度)

⑧ 異文化体験隊”に参加しませんか？

(二〇〇四年度)

⑨ 音楽朗読劇「戦争のつくり方」上演で、平和を考
える！
(二〇〇五年度)

⑩ 子育て支援「有償ボランティア」体験をしませんか？

(III)
(二〇〇六年度)

*活動の概要と学生たちの感想レポートを収めた『社会活動演習
報告集』を毎年度末に発行している。

これらのプログラムを企画するにあたって、つねに私の
頭にあったのは、次のようなことである。

・一人一人が持ち味を発揮し、それを束ね、また各自が荷
を分かち合い、責任を果たすことで、はじめて大きな仕
事ができる、という経験(成長の実感と仲間意識、感動
体験)をしてもらいたい。

・教室での講義では出会うことのできない「当事者」と接
近(交渉)させることで、現実社会とリアルな関係を結ば
せ、学ぶことの意味を考えさせたい。

・教員も学生と一緒に活動(共通体験・協同作業)すること
を通して、学生のもっているパワーを再確認する機会に
したい。

学生は、そうした活動を通して、何を感じ、学んでくれ
たのだろう。『社会活動演習報告集』に収められた感想レ
ポートを手がかりに見てみることにしよう。

心臓病児とその家族
に出会わせる！

「術後の心臓病児とその家族の
『乗鞍登山バスの旅』」(一九九七
年度)に参加したO君は、「心臓

に疾患がある児童」ということで、はじめは意識してしま
っていて手も出せないでいた」として、活動後の心の変化
を、こんなふうに分析している。

それは、未知の世界”だからです。分からないものは恐
ろしい。では、どうしよう。答えは単純。聞けばいい。彼
らは、実は普通の、いやうるさいくらい小学生だったの
です。

これは、僕たちが暮らしていく中で、他のことにも当て
はまります。コミュニケーションの大切さを、改めて認識
した気分です。

登山の付き添いを担当(マンツーマン)することになる子
どもとの顔合わせは、当日、バスに乗り込む出発直前。O
君が「手も出せないでいた」のも無理ない。参加した学生
の誰もがそうだったろう。

その状況を学生がいかにして打開していくか？ その方

法を試行錯誤のうえ見つけ出させるのも、このプログラムのねらいだったのだ。

企画、運営だけでなく、

「全員が舞台上立つ」!

「ミュージカルトーク ヴァ
レンズ」上演(一九九八年
度)のねらいは、学生にダ

ンスと歌を通して自己表現をさせる、ということだけでは
ない。イベントを実現し、多くの観衆を集めて成功させな
ければ意味がないからだ。

まず、参加した二十名の学生を企画部と組織部の二つに
振り分けた。

企画部の仕事は、①衣装(お揃いのTシャツの用意) ②
インストラクター(ダンス・歌)の依頼 ③全員分の練習用
ダンスビデオ・音楽カセットの制作、など。

一方、組織部は、①後援依頼文書(教育委員会) ②地域
住民チャシ・ポスター ③報道関係むけの宣伝文書、など
の作成を進めることになった。

その上で、①「全員が舞台上立つ」こと、②「外回り」
は全員参加で分担して行うこと、の二点を確認した。

岐阜新聞 2000年7月21日付

点字、指文字学ぶ

岐阜大が「バリアフリー」で公開講座

30高校生ら
入受講 車いす操作も体験

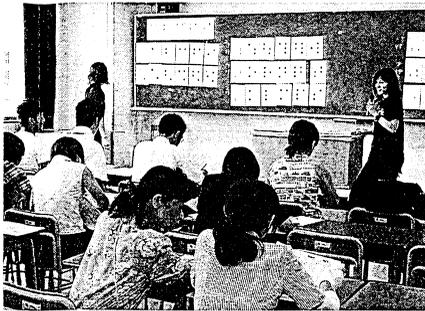
岐阜大地域福祉学部は二回、参加者は点字の読み
十白岐阜市柳戸の同大で、方々を学ぶ。
バリアフリーをテーマにし、
な公開講座「岐阜大バリアフリー社会」が、他
アプリ作戦2000を学部の学生はじめ、選子
運営、指導した。

二十世紀をバリアフリー
八人が中心となって、
近藤真庸同学部助教
(左)が、入門講座として電
脳ポックスや紙幣など目録
にある点字の読み方につ
て説明したが、生八人
が講師になり、点字、指文
字を使った左前の書き取り
や数字の読み方を指導し
た。この後、三グループに

分かれ、車いすの操作や白
内障眼鏡による老人体験な
ど、参加者がオウケラリ
ー形式で巡回して体験し
た。

三安二種に参加した岐
阜市器取田の倉村妙子さん
は、「娘と一緒に点字
を夏休みの学習課題にし
て勉強に来たが、楽しい
学ばせてくれた。

学生たちが講師になって行った点字、指文字の講座
は岐阜市柳戸、岐阜大



生たちも異口同音にそう語っている。

「みんなが企画者、運営者と同時に出演者」となつてイベントを創り上げていくという、この時の経験と教訓は、その後、「音楽朗読劇『戦争のつくりかた』上演(二〇〇四年度)に生かされていくことになる。

翌年(一九九九年)、翌々年(二〇〇〇年度)の二回は、福祉の観点から環境を見直すとともに、その経験を地域住民に伝える活動に取り組ませている。「バリアフリー作戦」がそれである。

バリアフリー実現のための

〈調査〉〈提言〉〈発信〉

バス停から講義棟に続く通路に設置された点字ブロック上に自転車が放置されている現状を解決するために、調査とそれを踏まえた提言づくりの活動をリードしてくれたA君(二〇〇〇年度)は、その経験を、次のような言葉で総括している。

どの時間帯、どの場所にどれだけの自転車置き場があるのかを調べることから始めました。そこから得られたデータをもとに、去年(一九九九年)の先輩たちが行ったキャンペーン(点字ブロックの意味を知らせるビラの配布と移動パフォーマンス)も考慮して、改善のための方策を考えました。

その結果、「駐輪場を増やす」「自転車のキャンパス内乗り入れを完全に禁止する」などの案が出ました。

これらの意見を持って、大学内の交通事情に詳しい教授を訪ね、アドバイスをもらったりもしました。

それを踏まえて作成した提言を、近藤先生が大学側に伝えてくださり、その結果、点字ブロック上から自転車が消えたのです。

バリアフリーという点では良い結果を得たと言えるかもしれませんが、自転車は場所を変えただけで駐輪場不足などの問題は残ったままです。このあたりが来年の課題となると思います。

先輩たちの活動を引き継ぎ、その経験を生かす。そして、後輩たちに課題を提示する。

もちろん、サークルではないので、毎年、新しいメンバーが参加することになる。当然である。だが、A君がいまじくも語ってくれているように、経験を積み上げながら、同じテーマを継続的に追究していくという在り方も、社会活動演習を充実させていく有効な方法的観点となりうる。授業改善のヒントを、こんなふうに学生から教えられることもあるのだ。

学生が「子育て」で
地域に貢献する！

「同じテーマを継続的に追究して
いく」という観点で、二〇〇一年
度、二〇〇二年度、二〇〇六年度
と三回にわたって取り組んできているのが、「子育て支援
『有償ボランティア』体験」である。

厚生労働省の方針で、前年(二〇〇〇年四月一日)から設
置(原則として人口五万人以上の市町村が対象)されること
になった「ファミリーサポートセンター」事業に参加(訪
問調査を含む)することで、子育て支援の現状と問題点と
ともに、「学生が地域に貢献する」ことの意義を体験的に
学んでもらうのがねらいであった。

学生たち全員が、「グッドライフサポート」(岐阜県下で
最初のNPO法人)が岐阜市から委託されて始めた「ぎふ
ファミリーサポートセンター」に「提供会員」登録をし、
学年末までに各自がそれぞれの条件を生かして、依頼に応
じた「有償ボランティア」体験をするのである(地元のフ
ァミリーサポートセンター訪問時に会員登録をしてきたと
いう学生も少なくない)。

「断られるのではないかなどと心配でとても緊張」しな
がらアポ取りの電話をした、というWさんの訪問記の一部
を紹介する。

大体の場所だけを手がかりに目的地に向かいました。児
童館のガラスの窓に名前が書かれていて、その周りに子ど
もが喜びそうなかわいい絵がはってあったのですぐにわか
りました。

私の家のホントにすぐ近くなのです。よく通る道沿いに
あったのに、私はいままで気づきませんでした。

医療機関と連携をとることで、たとえ軽度の障害や病気
があっても、依頼会員の要望に応えられるようにしている
と知って、すばらしいと思いました。

「私たちのような学生でも会員として参加できます
か?」と尋ねると、「是非!お願いします」という返事を
いただきました。

訪問したことで、早く活動に参加したい、という思いが
強くなりました。

いまはもう四年生になったWさんは、家が近いこともあ
り、二年生になってからもしばしば「有償ボランティア」
として子育て支援の活動に参加してくれていた、という。

学生を媒介として地域社会とつながり貢献することが可
能であることを、Wさんのレポートは示唆している。

もしれないかと思ったからです。それを実践することで「自分にも何か出来る」ということを確かめたいと思います。

学生たちは、この活動を「NO WAR & MAKE SMILE」プロジェクトと命名し、ネット絵本『戦争のつくりかた』を音楽朗読劇(手話入り)に向けて、オリジナルソング「Peaceful Days」づくりや、平和への思いを寄せ書き風にイラストしたプリントTシャツ制作、作曲の依頼、手話の先生探しを、講義の合間に自主的に集まっては、役割を分担しながら進めていった。

二〇〇四年八月六日。キャンパスの至るところで、紺のTシャツ姿で学生たちが歌う「Peaceful Days」が響いた。上演会場には、「新聞記事を見てきました」と言う被爆者の姿もあった。終了後、青いTシャツの輪のなかに被爆者の方も加わり、学生たちに語りかけてくださった。

また、この日、先輩たちのパフォーマンスを観て、「絶対この学部に入って学びたい」と受験し、入学後「合格しました!」と報告に来てくれた受験生もいる。

学生たちは、何を学んでくれたのだろうか?

「戦争がなくなればいいのになあ」という皆の思いがあふれている。これこそが平和につながっていくかもあるなあと感じた。

私はそれまで、戦争に反対するデモや署名運動などを見てきて、効果があるのかなあと考えていた。

しかし、今では、戦争をなくすために皆と何かしようという空気がもつと広まればいいなと思う。(Tさん)

原爆被害にあわれた方が、新聞で私たちの記事を読んで来てくださった。発表が終わった後、戦争のお話をしてくださった。生で聴くのが初めてだったせいもあり、とても印象にのこっている。これからは、私たちの世代も、次の世代に「戦争はいけないことだ」ということを伝えていかなければならないと思った。(Fさん)

TさんとFさんは、その後、私が開講する「基礎ゼミナール(教育学)」「専門ゼミナール(いのちと人権の教育学)」を選択し、一緒に学びを続けている。*

*Tさん、Fさんを含む五名のゼミナール生は、三年次の秋、沖縄へ「いのちを学ぶ旅」を体験している。その後、専門ゼミナールは、映画「父と暮らせば」(監督・黒木和雄を観たり、島本慈子『戦争で死ぬ、ということ』(岩波新書)、太田光・中沢新一『憲法九条を世界遺産に』(集英社新書)をテキストに「戦争と平和」の問題を通して「いのち」について思索を重ねていった。

その集大成として、地域科学部主催の公開講座(二〇〇六年十月十四日)「戦争と平和を考える」の最終日に、ゼミナール生を中心に

再結成した「NO WAR & MAKE SMILE」プロジェクトで、音楽朗読劇「戦争のつくりかた」を上演している。

④ 地域科学部がめざすもの、そして学生像

再び、『Region』（創刊十号）を取り出し、楽しみに残っていた、もう一本の特集企画「Regionアンケートに見る『地域科学部生』の意識と行動」の頁（二〇〇六年九月末「調査」）を開いてみた。

有効回答人数が、「二百九十八人」というから、学部生のほぼ半数が「回答」していることになる。そこには、学生だからこそ聞きだせた、そんな地域科学部生の姿も描き出されていて興味深い。

アンケートにみる 学生の意識と行動

Q 第一希望で、受験しましたアンケートにみる
か？
「第一志望でこの学部に来た」と答えた学生は約六割で、この傾向は女性に顕著なようだ。また、「地域科学部に入ってよかったですか？」という質問に対しては、女性の四分の三以上が「YES」と回答し、全体でも約七割の学生が「入ってよかった」と思っている。

Q ↓目指そう、満足度百%。(編集部コメント)
地域科学部が好きですか、それとも嫌いですか？

「好き」と回答した学生が百七十人、「嫌い」と回答した学生は八十二人。好きな理由には、「いろいろな分野が学べる」「楽しい」「先生が面白い」の他、「楽」「だからだろできる」という意見もある。一方、嫌いな理由は、「専門性がない」「資格が取れない」など。

Q ↓地域科学部は良く言えば「自由」で、悪く言えば「ゆるい」のである。つまり、目標があつてやりたい人と、だからだろのびのびしたい人にとつては、最適な学部。
(編集部コメント)
やりたいこと、ありますか？

「YES」が五五%で「NO」(四五%)を上回った。とくに六割を超える四年生が、「将来やりたいことがある」と具体的な記述で回答している。

↓今やりたいことを見つけることから始めるとしましょう！
(編集部コメント)

Q 自分を変えたいと思いませんか？
「変わりたい」と答えた人は二百五人。「変えたくない」(八十人)を大きく上回っている。とくに、一年

生(八五%)と四年生(八〇%)で顕著だ。

↓新しい生活が始まったばかりの一年生や、就職活動をし終えた四年生は、「自分を変えたい・変えなきゃ」という意識が強いのだろう。

(編集部コメント)

「地域科学部に入ってよかった」と答える学生が七割もいるということは、やはり教員としてはうれしいことである。

こうした傾向は、私たちが継続的に調査してきている「卒業生アンケート」においても、とりわけここ数年、顕著である。

毎年、彼(女)らが社会に飛び立つ日(卒業式)に、辛口の評価を覚悟して無記名で卒業生に回答してもらっているのだが、「地域科学部で学んでよかったと思いますか?」という質問に対して、「大変よかった」が六割以上、「よかった」まで含めると全体の九割を越す学生が肯定的な評価をしてきているのである。

私たちがめざす学生像

地域科学部発足から十年。その節目にあたって、いま私たちは「地域科学部 学術憲章」の制定をめざして準備を進めているところである。

「地域科学部 学術憲章(案)」の前文には、次のような「決意」が記されている。

「地域社会とともに歩む地域科学部」

地域科学部は、望ましい地域社会を構築するために人びとがどのように関わっていくべきかを探求する学部です。

そのため、郷土の自然や風土・歴史・文化を知る、その摂理を学ぶ、個人と社会の関係及び役割を学習する、ことに重点をおいた教育を行います。

これによって、人類が目指すべき持続可能な社会の原点を探求します。

「人類の平和と共存」に資する学生を育成します。

教員の対学生比「一対九」という利点を生かし、「社会活動演習」をはじめセミナー形式による少人数指導を軸にしたカリキュラムの中核に「専門セミナー」(一学年定員四名)を位置づけながら、へいのちへの感性と人権感覚を身につけた「人類の平和と共存」に資する学生を一人でも多く社会に送り出していけるように、職場の仲間と共に教育実践を進めていくつもりである。